

# 正倉院・聖語藏經卷について

飯田剛彦 (正倉院事務所保存課調査室)

## 국문요약

### 正倉院・聖語藏經卷에 대해서

본고는 正倉院・正倉院寶物・聖語藏經卷의 개요를 설명하고, 고대불교연구에 있어서 正倉院文書와 聖語藏經卷이 얼마나 중요한 자료인지에 대해 기술하고자 한다.

正倉院은 단순한 미술품의 보고가 아니며, 수장품은 불교적인 색채를 강하게 띠고 있고, 또한 한반도와 관련된 보물도 적지 않다. 따라서 고대 한반도에 있어서의 불교공간의 복원에도 도움이 될 자료라고 할 수 있다.

고대에 있어서 사경의 실태를 보여주는 보물로서는 正倉院文書가 있다.

불교학리뷰 (Critical Review for Buddhist Studies)

9권 (2011. 6) 77p~116p

正倉院文書는 奈良時代に 행해진 다양한 사경사업에 즈음하여 사경의 작업공정에 따라서 작성된 一大文書群으로, 당시에 행해졌던 사경사업의 구체적인 양상을 밝힐 수 있다.

또한 正倉院 사무소가 관리하는 불교관련 자료로 正倉院寶物과는 전례를 달리하는 聖語藏經卷이 있다. 聖語藏은 원래 東大寺 塔頭の 尊勝院의 경장으로 隋·唐代의 舶載經, 天平十二年御願經과 神護景雲二年御願經이라고 하는 奈良時代の 二大勅願一切經을 중심으로 약 5000권의 고사경과 판경을 전하고 있다. 불전연구에 있어서 가장 널리 이용되고 있는 것은 『大正新脩大藏經』인데, 12~13세기 개판의 고려판을 저본으로 하고 있기 때문에 그것만으로는 고대의 불전으로 거슬러 올라가기에 불충분하다고 생각된다. 따라서 교정을 위한 자료로서 고대의 사경이 대량으로 보존되어 있는 聖語藏經卷은 지극히 중요하다고 평가할 수 있다. 또한 白書 등도 많이 남겨져 있어서 국어학의 자료로서도 매우 가치가 높다.

聖語藏經卷 특히 天平十二年御願經과 正倉院文書는 奈良時代 사경의 現物과 그것을 제작하기 위한 문서군이라는 관계에 있다. 따라서 양자를 상호 관련지어서 검토함으로써 제작과정, 텍스트의 질적 향상을 지향하는 움직임 등을 판명할 수 있는 외에도, 유서가 분명하지 않은 문서와 경권을 상호 참조하여 명확한 성격을 부여하는 것이 가능해 지는 경우도 있다.

경권 중에는 新羅經으로 추정되는 경권도 있다. 聖語藏經卷甲種寫經의 대방광불화엄경 卷 72~80은 서사형식 등으로부터 新羅經으로 여겨지며, 正倉院寶物인 범망경도 天平勝寶 4년에 신라 사절이 東大寺大佛에 헌납한 新羅經이라는 견해도 있다. 후자가 天平勝寶 4년의 헌납품 그 자체라는 견해에는 따를 수 없으나, 이러한 다소 이질적인 경권의 성격에 대해서는 新羅經일 가능성도 포함하여 향후 조사할 필요가 있다.

이상이 고대신라불교를 연구하는 데 있어서 유익한 자료인 正倉院文書

와 聖語藏經卷인데, 正倉院文書에는 번각자료・사진판・목록이 있으며, 聖語藏經卷은 디지털판이 간행되었다. 이러한 것들을 이용한 연구가 한국에서도 활발히 이루어지기를 간절히 바란다.

주제어 : 정창원(正倉院), 성어장(聖語藏), 동대사(東大寺), 존승원(尊勝院), 천평(天平), 신호경운(神護景雲)

## はじめに

日本国外で、正倉院・正倉院宝物の存在をご存知の方は、どれぐらいおられるだろうか。ご存知であるとしても、本当の姿を理解されている方はかなり少ないのではなかろうか。古代の美術工芸品を伝える宝物庫であるとの認識は、端的な理解としては極めて穏当なものである。「シルクロードの終着駅」などと称されるように、世界帝国・唐に集積された数多くの精緻な美術工芸品が直接、もしくは韓半島を経由して将来され、庫内に伝存している。しかし、正倉院宝物を天皇遺愛の高級美術品とのみ捉えるのでは不十分である。今回の報告との関連でいえば、古代仏教の具体的なあり方を示す材料も多数残されている。それらには、日本の代表的な寺院である東大寺で古代に使用された仏具なども含まれるが、特に今回ご注目いただきたいのは、正倉院文書と呼ばれる一大文書群と、現在、正倉院宝物と併せて管理されている聖語藏經卷と呼ばれる古写経群である。今回の報告では、正倉院宝物の保存・管理、なかんずく文書・経卷の調査・研究を担当する宮内庁正倉院事務所の職員として、正倉院宝物と正倉院文書、聖語藏經卷の紹介を行い、特に正倉院文書と聖語

藏經卷からどのようなことが学べるのか、また、東アジアの仏教学にとってどのような意味をもつのかについて考えてみたいと思う。

## I. 正倉院・正倉院宝物について

### 1. 正倉院宝物の保存と管理

正倉院は東大寺大仏殿の北西に位置する、もと東大寺の倉庫である<sup>1)</sup>。東大寺は奈良時代、聖武天皇によって創建された日本の代表的な大寺院であるが、正倉院・正倉院宝物は明治時代に皇室に献納されて政府の管理下に置かれ、第二次世界大戦後は宮内庁正倉院事務所がその任にあたっている。宝庫の創建は8世紀に遡る。この正面33メートルの壮大な建造物の中には、木漆工品、金工品、薬物、典籍・文書、染織品など、主として8世紀の文物9000点以上が伝えられている。その中には、紙製品や染織品など、もし地中に埋まってしまったならば残らなかったものも多数含まれる。また、金工品などのように、出土するものと同じ種類の文物も多いが、正倉院宝物はあまり触れられることもなく秘蔵されてきたので、コンディションは出土品とは比べものにならないほど良好である。いずれの宝物も、製作当時の加工の痕跡が生々しく残っており、工芸・染織・文献等各方面の研究において極めて重要な資料となっている。

---

1) 宝庫は檜材製、寄棟造・本瓦葺・高床式の建物で、桁行333m、梁行9.4m、総高14mの規模である。三角形の部材を井桁に組んで壁とする、いわゆる校倉造りの倉庫としては現存最大である。なお、正倉院とは本来倉庫区画全体を示す呼称であったが、平安時代までには現存の宝庫以外の倉庫は全て焼失または倒壊してしまったため、現存宝庫を正倉院と称するようになった（ただし、現存の宝庫は当初から別格と位置づけられた最重要の宝庫で、同規模の倉庫が何棟も存在していたという訳ではない）。

取り出し・盗難・火災など、千数百年の間に宝物が消滅しかねない危機は幾度となく訪れた。中でも全てを一瞬のうちに灰燼と化してしまう火災は、最も恐ろしい災厄である。東大寺は戦火によって何度も焼かれ、大半の堂宇が失われたが<sup>2)</sup>、幸いにも正倉院宝庫は焼失を免れた。最も大きな危機として、鎌倉時代に雷が宝庫の扉を直撃したこともあったが、東大寺の衆徒が懸命に消火活動を行ない、被害を最小限に抑えることに成功した。宝庫は偶然に残った訳ではなく、人々の努力の結果残されたものといえる。現在は地震・火災に対する備えとしてコンクリート製の東西宝庫に宝物を収めて保存管理を行っている<sup>3)</sup>。

また、制度的に正倉院宝物を守ってきたのは、天皇の許可がなければ宝庫を開くことができない、いわゆる勅封体制である。平安時代以降、現地から離れた京都で開封の権限を有していたのは朝廷、宝庫の実質的な管理に当たっていたのは東大寺、という状況のもと、緊張を孕んだ両者の関係性によって宝物は保存されてきた。朝廷にしてみれば、大寺院という一つの権力主体が空間的に離れた場所で管理を行っていたことが、宝物に対する際の大きな枷になり、東大寺にしても、正倉院宝庫は寺の庫蔵でありながら、開扉すら自由に行うことはできなかった。現在でも勅封制度は維持されており、管理主体である正倉院事務所の職員ですら秋の2ヶ月間に集中的な点検・調査が許されるのみである。

2) 治承4年(1180)の平重衡による東大寺・興福寺の焼き討ちや、永祿10年(1567)に奈良を主戦場として行われた松永久秀・三好三人衆の合戦などで、大仏殿をはじめとする東大寺の主要な堂舎はほとんどが焼失している。

3) 西宝庫は昭和37年(1962)に建てられた鉄筋コンクリート2階建ての建物で、以後宝物の大半は勅封のかけられたこの宝庫に移され、現在に至る。内部は奈良時代の宝庫同様、1棟3倉形式で、収納する宝物の区分も引き継いでいる。

## 2. 正倉院宝物の概要

正倉院宝物の大半はその由来によって大きく3つのカテゴリーに分類できる<sup>4)</sup>。その筆頭に挙げられるのが、天平勝宝8歳(756)から5回にわたって東大寺盧舎那仏に献納された、聖武天皇遺愛品・内廷官司謹製の品々である。献納したのは、聖武天皇の正妃・光明皇后であった。各回の献納時の目録5通も正倉院に伝わっており、その記載から名称・法量・技法・材質や由緒など宝物の基礎情報が知られる。この5通の目録を東大寺献物帳と総称し<sup>5)</sup>、その所載宝物を帳内宝物と呼んでいるが、厨子、書卷、装身具、楽器、武器・武具、鏡、屏風など多種多様であり、かつ国際性を有する第一級の美術工芸品が多く含まれている。帳内宝物は、薬物など一部の例外を除いて、永久保存することが当初から原則とされてきた、正倉院宝物の中核をなす宝物である。

カテゴリーの2つ目は、東大寺の法要で用いられた什器類である。寺院の倉庫ゆえ当然ではあるが、天平勝宝4年4月9日の東大寺大仏開眼会で用いられた荘厳具や仏具、舞楽の衣装・楽器・面、または献納品等をはじめ、諸行事で使用された品々、また、寺内諸堂に備え置かれた什器が大量に残っている。具体的には、袈裟、塵尾、柄香炉、如意、三鈷、誦数、花籠、幡、献物几や献物箱などであるが、古代寺院空間を構成する要素がまとまって保存されている意味は大きい。

- 
- 4) 宝庫は1棟の内部を壁で仕切り、北倉・中倉・南倉の3倉に区分している。内部には各倉間を行き来するための扉等は存在せず、各倉が完全に独立する構造となっている。本文で触れる3つのカテゴリー、すなわち、①聖武天皇遺愛品・内廷官司謹製の品々、②造東大寺司関係品、③東大寺の法要で用いられた什器類は、それぞれ、北倉、中倉、南倉に収納されている。
- 5) 5通(5巻)の内訳は、国家珍宝帳、種々薬帳(以上、天平勝宝8歳[756]6月21日献物帳、北倉158)、屏風花託等帳(天平勝宝8歳7月26日献物帳、北倉159)、大小王真跡帳(天平宝字2年[758]6月1日献物帳、北倉160)、藤原公真跡屏風帳(天平宝字2年10月1日献物帳、北倉161)である。

3つ目は、造東大寺司関係品である。造東大寺司は東大寺造営を主導した大規模造営官司であるが、諸堂の建立、堂内の荘厳、仏像の製作、経巻の書写など様々な仕事を遂行する際に用いた実用的な品々がこの中に含まれる。具体的には、工芸材料や顔料、写経所文書、文房具、工具類、工人や写経生の仕事着などが挙げられよう。

以上、品質でいえば天皇の愛用品から下級官人の身の回りの品まで、様々な品目、材質、由来（舶載品・国産品）の宝物が大量に伝来している。非常に幅広い範囲をカバーするという点でも、当時の物質文化全体のあり方を推し量るうえで欠くべからざる存在である。

### 3. 韓半島関連品について

正倉院宝物には、唐製品をはじめとする舶載品が多く含まれ、素材としてはアジア全域、意匠としては遠くギリシャ・ローマの影響を受けたものまでが伝来する。韓半島とのつながりの窺えるものも多いので、ここでは具体的に紹介していくこととする。

まず、宝物本体に記された銘文から新羅製と判明する例として、「新羅楊家上墨」「新羅武家上墨」の陽刻銘を有する墨（中倉41）が挙げられる。ある程度の数量が作られる品で、銘の型押しが可能なためであろうが、製作者の銘が記された宝物は極めて稀である。

宝物本体ではなく、付札・付属品・部品・付着物等から韓半島との関連が推測できる宝物もある。獣毛を縮絨加工して製作した敷物である花氈（北倉150、中202）や色氈（北倉151）の中には、「念物」（新羅からの舶載品購入申請である天平宝字4年〔752〕買新羅物解にみえる用語）や「韓舎」（新羅の官位名）との語を含む墨書の記された麻布箋を有するものがあって、新羅との交易品であることが分かる。原料としてカシミアに類似

した古品種の山羊の毛を使用し、また、中央アジアに産する植物の実や種子が混入していることなどから、同地で製作された品が中継貿易で新羅からもたらされたものと考えられる。

華嚴經論帙(中倉59)には内貼として新羅の徴税関係文書(いわゆる「新羅村落文書」)が用いられていることが確認され、新羅製であることが判明している。東大寺と新羅の華嚴經学の密接な関係を示すと考えられるが、収納されていた新羅經はすでに失われている。

また、入れ子状の重ね碗である佐波理加盤(南倉47)の一組にもクッション材として新羅の文書(いわゆる「佐波理加盤付属文書」)が挟み込まれており、同じく新羅製であることが分かる。佐波理は一般的に80%前後の銅と20%前後の錫との合金であって、正倉院には匙346枚・皿716枚・加盤432口・蓋2枚・承盤2枚など大量の佐波理製品が残されているが、いずれも化学組成はほぼ一致する。加盤の「五重鉢」をはじめ、これらを購入した記録が正倉院文書の買新羅物解にも多くみえること、雁鴨池遺跡などの韓半島の遺跡で院蔵品と同形の匙などが発見されることなどから、他の佐波理製品も新羅から輸入されたものと推定される。なお、佐波理加盤付属文書は貢納物の授受(紙背は俸禄支給に関する記載)について記した文書であるが、紙質、界線と文字との関係などから下書きや覚書きの類とみられる。一方、華嚴經論帙内貼の新羅村落文書は正式な文書であり、正倉院には別の位相に属する新羅の文書が残されていることになり、大変興味深い。これらの料紙の質、書体、筆記時の意識の表れ等を比較すれば、新羅における文書行政の一端を窺うことができよう。

出土品との類似性から新羅製と判断できるものもある。白銅剪子(南倉33)は蠟燭用の芯切り鋏であるが、韓国・慶州の雁鴨池遺跡より同形



品が出土したことにより新羅製であることが分かった。その出土品の刃先には輪状の囲いが付されていて、これを手掛かりとして正倉院の品で外れていたその部分が銅鉄類残片の中から発見された。

また、正倉院には碁盤が数点伝存するが、桑木木画碁局（中倉174）のように星目が9個配された中国由来のものに対して、17個配されている木画紫檀碁局（北倉36）は韓半島製であるとの説もある<sup>6)</sup>。楽器としては、新羅琴（北倉135）と呼ばれる宝物が伝わり、慶州博物館蔵の新羅時代の土偶装飾長頸壺に十二絃をもつ同形式の琴が描かれていて、韓半島に源流を持つ楽器であることが分かる。

小草（北倉52）、遠志（北倉86）、甘草（北倉99）、竹節人参（北倉122）などの薬物は中国の華北・東北や韓半島で採取できるので、韓半島産の可能性も大いに存する。

その他、かつて正倉院に収納されていたが失われてしまったもので、東大寺献物帳ほかから韓半島との関連を窺わせるものも多くある。具体的には、百済の義慈王から内大臣藤原鎌足への贈答品の赤漆欄木厨子をはじめ、金鏤新羅琴、銀装高麗様大刀、緑地高麗錦袋、百済画屏風などが挙げられよう。

以上、正倉院宝物の中で韓半島との関連の窺われる品について紹介した。材質・組成や銘文・付属品から特定できないものも他にあることを踏まえるならば、そのつながりは極めて密接なものといえよう。これらは、古代韓半島の物質文化の一端を解き明かす資料ともなるであろう。

最後に、正倉院文書中の、先に紹介した天平勝宝4年（752）の買新羅物解（続修後集43）について触れたい<sup>7)</sup>。これは当時の日本の貴族が作成

6) 増川宏一「宮廷の盤上遊戯 正倉院の遊戯盤が語るもの」（『週刊朝日百科 皇室の名宝 正倉院 中倉』朝日新聞社、1999）。

7) 天平勝宝4年（752）の買新羅物解は、反故文書として、著名な鳥毛立女屏風（北倉44）の画

した新羅舶載品購入申請文書であるが、新羅からの輸入品が具体的に分かる史料として貴重である。実際に輸入されたものとして、薬物(桂心・人參・牛黄・紫根・甘草・遠志・大黄)・香料(麝香・沈香・薰陸・丁子・青木香)・染料(蘇芳・臘脂)・顔料(朱沙・胡粉)・金属(金)・器物・調度(鏡・水瓶・匙・重ね鉢・数珠・牙尺・櫛・大盤・如意・花氈・火炉・屏風・錫杖・箸・牙笏・鞍具・燭台)などの名がみられる。この中には新羅産のものや、新羅が中継貿易の担い手となって日本に伝えたものが含まれる。正倉院文書には他にも韓半島系の氏姓をもつ人物に関する情報も記載されているので、両国の人的交流について検討するうえでも欠かせない史料である。

## II. 正倉院文書について

### 1. 写経所関連史料としての正倉院文書

Iですでに触れた正倉院文書は、正倉院宝物に含まれる奈良時代の一大大文書群で、日本に現存する8世紀の文書のほぼ全てである。現在は、667巻5冊に整理され、点数は1万点以上を数える<sup>8)</sup>。正倉院文書と聞いて

---

面本紙や下貼りに二次利用されていたが、江戸時代の修理の際に取り出された。多くは明治時代に正倉院文書続修後集巻43に整理されたが、江戸時代に一部外部に流出し、東京の前田家尊経閣文庫などに伝存している。それらを含め、池田温「天宝後期の唐・羅・日関係について」(『東アジアの文化交流史』吉川弘文館、2002。初出は1995)において買新羅物解に関する情報の集成が行われ、釈文が示されている。

- 8) 正倉院文書は、江戸時代の天保年間に徳井田忠友によって整理された正集45巻(中倉15)、それを引き継いで明治時代に整理された、続修50巻(中倉16)、続修後集43巻(中倉17)、続修別集50巻(中倉18)、塵芥文書39巻3冊(中倉19)、続々修440巻2冊(中倉20)の、計6つのパートから構成されている。

大半の日本人がイメージするのは、戸籍・計帳・正税帳等の地方から中央に進上された帳簿や、中央官庁の公文であるが、これらは不要になって廃棄された後に再利用された、いわゆる裏文書であって、本質は再利用先にある。すなわち、東大寺に置かれた皇后宮職（光明皇后のための役所）管下の写経所（のちに造東大寺司管下となる）が、数度の一切経書写事業や臨時の写経を行った際に作成・集積した文書群が正倉院文書なのである。よって、正倉院文書研究の本筋は、古代の写経事業を復元することであると極言しても誤りではない。

ただ、正倉院文書を史料として扱う際には、いくつかの手続きを経ねばならない。文書は奈良時代の再利用の際に分断されており、さらに19世紀初頭に始まる一次文書に注目しての再編成の結果、写経所文書も分断されてしまったのである<sup>9)</sup>。よって、論理的・物理的な観点から旧状を復元のうえ、研究せねばならない。また、写経は様々な作業工程の積み重ねであるため、それを誤りなく処理するために作成されるのが写経所文書である。そのため、写経所文書は単独ではなく、どの写経事業の何の文書であるのか、つまり関連文書群のまとまりの中で考えるべきものである。個別にみているだけでは、どの写経事業の帳簿であるのか分からない場合が多いが、関連史料を集めることによって、その性格が判明する場合がある。

9) 江戸時代に至るまで、写経所文書は奈良時代のままの状態では保存されてきたが、天保4～7年（1833～37）に行われた宝庫修理のための開封の際、国学者・穂井田忠友が印のある公文書（中央官庁公文や諸国作成の戸籍・計帳・正税帳などの一次文書）に注目して抜き取りを行い、奈良時代文書の決定版とでも称すべき正倉院文書正集を編集・成巻した。以後、明治時代においても同様の方針による整理が行われたため、写経所文書の旧状が損なわれることとなった。

## 2. 写経作成の諸工程と文書のセット

では、写経はどのような工程を経て作成され、また、その際にどのような文書・帳簿が必要とされたのであろうか。以下その工程を概観する。

① 内は各工程に必要な文書である。

(1). 筆・墨・紙等の必要物資の確保 (筆墨申請解・用度申請解・経紙出納帳)、(2). 底本の取り寄せ (請本状)、(3). 装潢による継 (通常20枚の経紙を貼り継ぐ)・打 (平滑度を上げ、滲みを防止する)・界 (罫線を引く) の作業 (充装潢帳・上紙帳による管理。装潢からは手実による作業量報告)、(4). 写経従事者への必要物品の充当 (充紙筆墨帳)、(5). 経師による書写 (底本充当は充本帳による。作業量は1日3700字平均。経師からは手実で作業内容・量の報告)、(6). 校生による校訂作業 (校正は2~3回。作業量は1日平均230張。校正の管理は校帳により、校生からの校正結果の報告は勘出注文。作業量は手実で報告)、(7). 装潢による経巻の仕立て (標紙・軸・緒等の装着。充装潢帳・手実)、(8). 布施 (給与) の支給 (手実帳をもとに。上級官司へ布施申請解を出し、支給には布施充帳を作成)、(9). 完成した経巻の貸出 (経疏出納帳)、(11). 上級官司への事業報告 (告朔解、上日案)

作業工程管理・労務管理・物品管理・機構運営のために、様々な文書が作成されていたことが分かる。写経事業毎に作成される文書の種類には違いがあり、また、残存率にも差があるので、上記の文書が完備する訳ではないが、このようなセットを想定しつつ事業ごとに文書をまとめていくことによって古代の写経事業の実態がみえてくる。記載されるのは、人名 (写経従事者)・経巻名・物品名 (写経用度・食料)・数量などで

あるため、無味乾燥と捉えられて敬遠されることも多いが、これらの史料を読み解くことができれば、政治史（王権）、仏教史（制度、思想）、官僚制度史（事務処理方法）などにおいても、さらに大きな成果が挙げられる。

### III. 聖語藏・聖語藏経巻について

#### 1. 聖語藏の歴史

今回のメインテーマである聖語藏経巻とは 東大寺塔頭・尊勝院の経藏である聖語藏に伝えられた仏教經典群である。尊勝院は、天曆9年（955）、東大寺別当光智が村上天皇の勅を受けて建立した、東大寺の華嚴・真言二宗兼学の院家である。学問の上では、三論宗の東南院と並び、東大寺の代表的な塔頭とされる。寛弘5（1008）に一度目の炎上、治承4年（1180）には平重衡による焼き討ちにより大仏殿・三面僧坊とともに類焼したが、その後、建久元年～正治2年（1190～1200）に再興された。現在の聖語藏経藏の創建もこの時期とされる。

景雅、弁曉（華嚴経学復興）、尊玄、明恵、宗性、光曉、聖禅、覚聖等の著名な学僧が尊勝院と深い関わりを持っており、華嚴を主とした教学面での中心として栄えたが、室町時代末期には廃絶しており、土地は明治時代に売却されて小学校となった。聖語藏・聖語藏経巻は明治26年（1893）に皇室に献納され、当時の宮内省が管理するために同29年に蔵ごと正倉院敷地内に移されて現在に至っている。経巻は、昭和35年（1960）に経藏から正倉院の東宝庫（奈良時代の校倉ではなく、鉄筋コンクリート製の新宝庫）に移納された。現在、明治時代製作の春慶塗の経箱にほぼ10巻

ずつ収め、それを4段重ねてひとまとまりとして管理している。経巻を収納した一角には宮内庁長官封を施して管理している。

## 2. 聖語蔵経巻とは

聖語蔵経巻は、奈良時代に東大寺に入った経巻を中心として、その後尊勝院が廃絶する室町時代末期まで、長年にわたって収集された仏教經典の総称である。まず注目されるのは、隋唐からの舶載経と、聖武天皇の皇后である光明皇后が発願した天平十二年御願経（天平12年は西暦740年）、その娘・称徳天皇発願の神護景雲二年御願経という2つの奈良時代の一切経である。それ以外の写経は「字体の優劣」「時代の新古」「経巻としての品位」等の判断に基づき、甲種・乙種の二種類に整理される<sup>10)</sup>。甲種写経の中には、奈良朝写経や平安時代初期の経巻も多く含まれており、隋唐経と目される写経（甲種写経78号十地経論巻6など）や、近年、新羅からの舶載経と推定された写経も存する。版経は、中国の宋版、日本の寛治版（日本最古の版経。寛治2年[1088]開版）が含まれ、それ以外は写経同様、甲種版経、乙種版経として分類される。その他、雑書として『老子』『蒙求』『白氏文集』等の漢籍も伝存している。

明治時代に皇室に献納されたのち、明治43年から帝室博物館による経巻の分類整理・修理が始まる。整理の結果は『正倉院聖語蔵経巻目録』（奈良帝室博物館、昭和5年[1930]）にまとめられ、現在もその類・号数に準拠した管理が行われている。同目録による聖語蔵経巻の内容構成は以下のとおりである。

10) 『正倉院聖語蔵経巻目録』（奈良帝室博物館、昭和5年[1930]）の凡例による。

## 写經之部

第1類	隋經	8点	22卷
第2類	唐經	30点	221卷
第3類	天平十二年(740)御願經	126点	750卷
第4類	神護景雲二年(768)御願經	171点	742卷
第5類	甲種写經	90点	316卷
第6類	乙種写經	290点	2012卷

## 版經之部

第7類	寛治版	1点	8卷
第8類	宋版	12点	114卷
第9類	甲種版經	7点	54卷
第10類	乙種版經	33点	703卷

## 雑書之部

第11類	雑書其他	15点	18卷
計		783点	4960卷

經卷の総巻数は4960巻である。大正11年から昭和2年にかけて東京に運ばれ、今日最も一般的に使用される漢訳仏典のテキストである『大正新脩大藏經』の校訂にも使用されている。平成12年からは、丸善株式会社により『聖語藏經卷』デジタル版としてカラーデジタル画像を収めたCD・DVDが刊行されている。現物をみる機会としては、毎年、奈良国立博物館において開催される『正倉院展』があり、隋唐經、天平十二年御願經、神護景雲二年御願經から1巻ずつ出陳されるのが通例である。

聖語藏經卷は、仏教学（『大正新脩大藏經』等通行本の校勘、敦煌写經等との比較研究、隋唐代の仏典の状況把握）、歴史学（正倉院文書と併せ考えることで、当時の仏教受容のあり方、写經事業の運営実態が判

明)、国語学(胡粉で書かれた白点。平安時代初期に始まる最初期の訓点資料)、書道学など、諸分野による研究の対象となる極めて貴重な資料である。

### 3. 二つの一切経—天平十二年御願経と神護景雲二年御願経

ここで、聖語蔵に遺る2つの一切経について述べてみよう。

#### 1) 天平十二年御願経(五月一日経)

天平十二年御願経は、光明皇后が亡父藤原不比等・母橘三千代の冥福、聖武天皇の福寿、臣僚の忠節などを祈って発願した一切経である。各巻末尾に付された願文の日付によって五月一日経とも呼ばれる。聖語蔵に750巻、巻間に250巻程度現存する。書写開始は天平8年頃(それ以前の開始とする説あり)で、玄昉が唐から将来した『開元釈教録』(一切経の目録)に基づいて、5048巻の書写が目指された。底本には玄昉将来経が多く利用されている。大仏開眼会の行なわれた天平勝宝4年(752)頃から未完の部分を残してまとめ段階に入り、より厳密なテキストの完成を目指して、同7・8歳に行われた大安寺・興福寺・元興寺・薬師寺を動員しての大規模な勘経によって完成をみる(天平14年に『開元釈教録』にない章・疏も書写するよう方針転換があつて、最終的な総巻数は7000巻といわれる)。漢訳仏典の導入とは仏教の受容であると共に、中国の最新文化を受け入れることであり、この書写事業は、まさに空前絶後の一大文化事業といえる。

天平十二年御願経は、Ⅱで述べた、東大寺に置かれた皇后宮職系の写経所によって書写されており<sup>11)</sup>、その写経所の作成した正倉院文書によつ

11) 皇后宮職系の写経所とは、藤原光明子の私宅に置かれた写経組織を起源とする。天平元年



て製作過程（書写の進捗状況、個別経巻の書写時期や写経者、底本や校正者等）が詳細に判明する点で非常に貴重な例である。奈良時代の一切経と、それを製作する際の帳簿類が一括して残る極めて稀有な事例といえる。

## 2) 神護景雲二年御願経

神護景雲二年御願経は、聖武天皇の娘・称徳天皇の御願によって書写され始めた一切経である。巻末に、神護景雲2年(768)5月13日付の称徳天皇発願文が付されるものがある。厚手で褐色味の強い料紙を使用し、肉太で堂々とした筆跡が特徴の経巻で、聖語藏には、この景雲経に分類される経巻が742巻ほど存する。

しかし、先述の願文のある経巻は聖語藏の神護景雲二年御願経には4巻しか残らない。むしろ巷間に流出したものに多く残る。聖語藏の神護景雲二年御願経に分類される他の経巻は、料紙(寸法・紙質等)、字体、書写形式等から判断して分類されているに過ぎないのである。これは、大半の天平十二年御願経に願文が付され、自らの素性を明らかにしているのと対照的である(ただし、天平十二年御願経にも、章・疏には願文が付されない、天平16年以降書写分には願文のある経巻とない経巻がある、などの特徴もみられる)。なぜ、多くの経巻に願文が付されなかったのか、という問題は容易には解決できないが、願文のない神護景雲二年御願経が多く存在することは事実である。一方、現在景雲経に分類されてい

---

(729)の光明子立后によって皇后宮職管下の写経機関と位置づけられるようになり、天平13年頃にそれまでの東院から東大寺の前身寺院である福寿寺に移転して福寿寺写一切経所となつて、翌年には金光明寺写経所と改称される。天平19年には皇后宮職から離れて造東大寺司の所管となり、東大寺写経所となつた。以後、称徳朝での活動停止期間を経て、宝亀7(776)まで存続が認められる。

るものの、実際には同時期の別の一切経の一部が混入している場合も多いようである。願文によって、自己の素性を語らないこれらの経巻を特定するには、やはり正倉院文書の利用が欠かせない。ただし、一つ問題がある。天平神護から神護景雲年間にかけて(765~769)、写経の担い手としては内裏系統の写経所が主体となっており、神護景雲二年御願経書写もこの写経所が行った。よって、皇后宮職系の写経所文書を主体とする正倉院文書には、神護景雲二年御願経に関する史料の残存率が低いのである。そうになると、聖語蔵経巻で神護景雲二年御願経に分類されている経巻のうち、皇后宮職系の写経所文書と対応する経巻を特定し、それらを差し引いていくことによって、実際の神護景雲二年御願経を浮き彫りにしていく方法を採らざるをえない。今後は、上記の方法を用いて聖語蔵経巻の分類に関する再整理を進めねばならない。

#### 4. 東大寺系以外の経巻の流入について

現在、聖語蔵経巻で神護景雲二年御願経に分類されている中に、他の一切経が混入している可能性の高いことは上記で触れたとおりであるが、皇后宮職系の写経所が行った一切経以外に、全く系統を異にする経巻も含まれている場合もあり得る。

神護景雲経に分類されている中に四分律巻24があるが<sup>12)</sup>、筆跡によれば天平十二年御願経とさほど変わらない時期の写経と判断される。この経巻には僚巻もなく聖語蔵では孤立するが、正倉院文書の中の、天平17年(745)に写経所にあった経巻の目録に「四分律一卷〈第四 / 不知本所〉」とある経巻に相当する可能性がある。なぜなら、聖語蔵神護景雲二年御願経四分律巻24の内題には「二分律巻第四」と記されているからである。

12) 神護景雲二年御願経第169号として分類されている。

天平14・15年頃には、新たな底本の入手が困難となって行き詰っていた天平十二年御願経書写事業では、「写了内欠経」などのタイトルを持つリストを作成し、内裏・貴族の私邸・寺社等から底本を借り出して、懸命に未写部分を補おうとしていた。聖語藏経巻中に現存する東大寺本と系統の違う経巻には、このような形で東大寺に借り出された後、貸出し元が分からなくなって櫃内に残ってしまったものが含まれることになる。その他、聖語藏経巻には、平安時代以降に教学のために収集された奈良時代の写経なども伝来しているであろうが、様々な可能性を想定しながら、神護景雲二年御願経や甲種写経に分類されている個別経巻の来歴を探る必要がある。

## 5. 現存経巻に残された様々な痕跡

ここでは、少し方向性を変えて、聖語藏経巻の現物に即した情報の紹介を行いたい。

### 1) 白書

聖語藏経巻には白書の記載が多く認められる。その性格は大きく2つに分けられるが、第一には、書写後の校正段階で加えられた白書がある。これは、誤字・脱字・衍字・脱行・重複行を指摘・訂正するもので、訂正必要な行の欄外上段に丸印を付したり、誤字に傍書を加えたりするなどの記載である。もう一つは、訓読のために記された訓点や、経文の内容に関わる書き入れ等、経巻の利用段階で加えられた白書である。聖語藏経巻には平安時代極初期の訓点が記されており、日本での訓読の歴史がどのように始まったのかといったような国語学の問題、各時代における仏教の教義理解についての問題などを考える上で、非常に貴重な資料である<sup>13)</sup>。

## 2) 雌黄による訂正

文字を訂正することを「雌黄を加える」「雌黄を下す」などの言い回しで表現することがあるが、これはかつて經典の黄染の料紙に書かれた文字を雌黄で訂正したことによるという。実際、聖語藏經卷天平十二年御願經第99号の根本薩婆多部律撰卷3の文字の訂正に使用された黄色の顔料を分析したところ、雌黄(石黄 [orpiment]) のこと。硫黄とヒ素の混合物) であることが判明した<sup>14)</sup>。奈良時代に言い回しどおりに雌黄が用いられていたことは大変興味深い。訂正の方法としては、そのほかに、擦り消し、拭き取り等もある。

- 13) 聖語藏經卷にみられる白書を扱った主な研究としては、遠藤嘉基「正倉院の点本調査をめぐって」(『正倉院年報』7、1985)、大矢透『仮名遣及仮名字体沿革史料』(勉誠社、1969。1910年刊行本の複製)、春日和男「聖語藏御本四未曾有經試読」(『訓点語と訓点資料』第2輯、1954)、春日政治「正倉院聖語藏点本の調査」(『古訓点の研究』風間書房、1956。初出は1953)、同「成実論天長点統紹」(同上、初出は1933) 同「聖語藏本中觀論の古点について」(同上、初出は1934)、同「聖語藏本央掘魔羅經の字音訓」(同上、初出は1938)、同「金剛般若經講述嘉祥点」(同上、初出は1944)、同「聖語藏本唐写阿毘達磨雜集論の古点について」(同上。初出は1940)、同「初期点本例」(同上。初出は1952)、同「聖語藏本菩薩善戒經点」(同上。初出は1955)、小林芳規「正倉院聖語藏華嚴經探玄記古点と大乘阿毘達磨雜集論古点について」(『正倉院年報』7、1985)、鈴木一男「聖語藏經卷調査略史」(『初期点本論攷』桜楓社、1979。初出は1979)、同「正倉院聖語藏点本」(同上。初出は1977)、同「聖語藏願經四分律卷四十六破僧捷度古点訳文」(同上。初出は1973)、同「聖語藏御本唐写大乘阿毘達磨雜集論調査報告その一」(『訓点語と訓点資料』第2輯、1954)、築島裕「聖語藏弁中辺論天厝点」(『訓点語と訓点資料』第1輯、1954)、同「聖語藏本菩薩善戒經古点の——如法住菩薩畢竟地卅二相八十種好品について」(『訓点語と訓点資料』第32輯、1966)、正倉院聖語藏大智度論古点及び央掘魔羅經古点について」(『正倉院年報』7、1985)、中田祝夫「正倉院聖語藏 / 東大寺図書館蔵」地蔵十輪經元慶元年加点本に見えたる字音資料」(『訓点語と訓点資料』第1輯、1954)、同「正倉院御本 / 東大寺所蔵」地蔵十輪經の元慶七年訓点について」(『古点本の国語学的研究 総論篇』大日本雄弁会講談社、1954)、同「正倉院本」地蔵十輪經〈巻五・七〉元慶点(古点本資料叢刊2)。(勉誠社、1980)、廣濱文雄「聖語藏經卷調査報告」(『訓点語と訓点資料』第1輯、1954) などがある。

- 14) 「年次報告」(『正倉院紀要』27、2005)。

このように経巻に残された一つ一つの細かい痕跡を分析することも、古代の写経の実態に迫るうえでは重要な方法である。

## 6. 漢訳仏典のテキストとしての古写経の価値

本章の最後に、仏教学にとっての聖語藏經卷の価値について触れる。漢訳仏典のテキストとして、現在最も広く利用されているのは、『大正新脩大藏經』である。『大正新脩大藏經』は高麗版を底本とし、宋元明版及び聖語藏經卷にて校訂を行っている。底本となった高麗版は厳密な校訂を経て開板されたものではあるが、12・13世紀の成立であるため、必ずしも古代のテキストのあり方をそのまま踏襲している訳ではない。日本の仏教学研究・落合俊典氏は、「矛盾のある先行文献の問題解決に高麗時代の価値判断がなされた感が強いように思われる」と指摘する<sup>15)</sup>。よって、『大正新脩大藏經』を利用する際には、相応の注意が必要とされることになる。

平安時代・鎌倉時代の一切経の底本として使用されたのは、奈良時代以降に書写された経巻であり、奈良時代の経巻は単に古いという価値だけでなく、日本の仏教を根底から支えているものである。さらに敷衍すれば、テキストとしての奈良時代古写経は古代の仏典のあり方を伝える点で、東アジアの仏教学全体にとっても極めて貴重な財産である。聖語藏經卷をはじめとする日本に伝来する古写経の重要性が広範囲で認識され、さらに厳密な校訂が進むことで、より古く、正確な經典の情報が得られるようになることが期待される。

15) 落合俊典「学術フロンティア『奈良平安古写経研究拠点の形成』の研究概要と現状、意義について」(国際仏教学大学院大学『いとくら』創刊号、2006)。

## IV. 正倉院文書と聖語藏經卷

### 1. 正倉院文書と聖語藏經卷とのリンク

Ⅱ・Ⅲで正倉院文書、聖語藏經卷についてそれぞれ概述した。すでに触れたように、正倉院で管理する、この二つの歴史資料は、極めて密接な関係にある。特に天平十二年御願經と正倉院文書は、書写された經卷と、その書写を担う写經所の事務帳簿という関係の代表例で、それぞれ残存率も高い。このことにより、經卷の底本や担当經師、書写の進行状況、書写後の管理や貸出等の利用状況など、明瞭な事柄が多い。正倉院文書に残る写經関連の史料は、神龜4年(727)から宝龜7年(776)に至る50年間であるが、その間、数度の一切經(最も早い一切經書写は天平5年[733]に開始)と臨時写經が行われた。よって、天平十二年御願經以外の經卷についても、書写の過程を再現できる場合がある。その際に大きな手掛かりになるのが、經卷の卷末に残る紙背注記である。つまり、卷末紙背に、その經卷の用紙数、校正担当者名、校正年月日等の情報が残る經卷がある。これらは製作時の覚書として記されたもので、本来であれば切除の後に廃棄(文書料紙として二次利用される場合も含む)されることも多い。これが残っていて、正倉院文書の記載と一致する場合があつて、どの写經事業に属する經卷であるのか、判明することがある。逆に、經卷との対応から、文書の性格、すなわちいずれの写經事業で作成されたものなのかが分かる場合も当然ありうる。

ここでは、天平十二年御願經を例に取り、正倉院文書の記載と聖語藏經卷の現状が一致する例として、勘出注文と大宝積經の対応関係(1)、また、長期間にわたる、經卷の複雑な校勘過程が正倉院文書により明らかになった例として、天平十二年御願經四分律補訂再編の動向(2)を

具体的に示す。

### 1) 正倉院文書の勘出注文と天平十二年御願經大宝積經

正倉院文書中の勘出注文（続修後集巻37）は、經卷の校正に関する内容であるが、対象經卷名が記されていない。「大唐義浄」訳とあることから、大宝積經の校正記録であると推定されるが、実際に天平十二年御願經の大宝積經を検じたところ、勘出注文の記載と対応することが分かった。すなわち、勘出注文の対象經卷巻15に関する記載に「開一句所〈可有七言/一句已缺〉」とあるが、天平十二年御願經の大宝積經巻15開巻の七字偈中、「無礙智弁望宣説」の一句が空白となっている。また、勘出注文の対象經卷巻111に関する記載に「隨五言一句〈必以本經/勘而可正〉」とあるが、同じく天平十二年御願經の大宝積經巻111の14番目の五字偈中、「哀愍常攝護」の一句は朱書で補筆されたものである。

### 2) 天平十二年御願經四分律補訂再編の經緯と唐經四分律について

1)の例は単純明瞭なリンクの一つであるが、より複雑な經卷の由緒が文書によって明らかにされた例を次に紹介しよう。聖語藏經卷の四分律は、天平十二年御願經に計31卷、唐經に計16卷、神護景雲二年御願經に1卷がそれぞれ伝存する。天平十二年御願經四分律には内題・尾題に、朱書・白書による数段階にわたる訂正の痕跡が認められ、また、大藏經、唐經の分巻位置にあたる箇所にも白書・朱書・付箋でその旨が示されている。天平十二年御願經四分律にみられる上記の混乱とその修正について、正倉院事務所長杉本一樹氏は題の訂正に関する詳細な分析と、正倉院文書の記載に基づく、天平十二年御願經四分律を巡る動向の把握を行い、以下のような補訂作業の經緯を復元している<sup>16)</sup>。

天平十二年御願經四分律の書写時点(天平9・10 [737・738])では玄昉所蔵の取り合わせの50巻本を底本として使用したが、『開元釈教録』などの情報をもとに60巻のように割り振って墨書内題等を付した。内題・尾題の混乱状況からみて、全体の構成も理解しないまま書写されているうえに、本文にも重複や大幅な未写部分のある不完全なテキストであった。その補訂作業が必要であるとの認識は、天平14年頃から持たれており、校訂のために様々なテキストの検索が行われていたようである。天平18・19年に東大寺の僧・安寛によって内題・尾題の朱筆による訂正および切り継ぎによる本文の補訂再編が行われた。その後、元興寺本などを用いて天平勝宝2～5年(750～753)頃に更なる補訂再編が実施される。白書の一部はこの際に加えられたものらしい(もとの50巻本としてのあり方を復元した上で、過不足を調整する方針)。さらに現存の唐經に基づく勘經(内容にまで踏み込んだ校訂)が天平勝宝6年以降に行われた痕跡を天平十二年御願經四分律の白書訂正に窺うことができ、これは鑑真将来經の登場と軌を一にしているので、現存の唐經が鑑真将来經そのものであることになる。

以上は杉本氏の研究成果の概要であるが、現存する二種の經卷に残された様々な痕跡と、正倉院文書から知られる經卷の貸し借り等の情報を擦り合わせることによって、当初不十分であった天平十二年御願經四分律に、テキストとしての一連性・一貫性をもたせるために当時の人々が重ねた努力の跡を整理・復元することができたのである。

## 2. 正倉院文書中に遺る写經用具としての紙

写經の際に書記媒体以外の用途に使用された紙製品の反故が、正倉院

16) 杉本一樹「聖語藏經卷『四分律』について」(『正倉院紀要』29、2007)。



文書に転用されたり、一緒に保存されて遺るケースがある。本節で紹介するのはそのような例で、聖語藏経巻とも物的な関連性を有するものである<sup>17)</sup>。

### 1) 「端継」

正倉院文書の中の手実帳と称される帳簿は、写経作業従事者からの個別報告書を連貼したもので、個々人の作業量の把握・給与支給の基礎資料として作成された。手実帳について、料紙の面に注目してみると、幅の狭い褐色・厚手の紙と幅広の白っぽい薄手の紙とが1セットになっていることが多い(他種の帳簿でも時々みられる)。幅の狭い紙は紙質、界線の存在、紙高からみて、写経料紙の断片であり、幅の広い紙には界線の引き流れが残る<sup>18)</sup>。写経は、装潢によって、(1). 料紙を必要枚数分貼り継ぐ(「継」)、(2). 紙を打って平滑さを高める(「打」)、(3). 淡墨などを用いて縦横の界線を引く(「界」)という準備のなされた後、(4). 経文を書写する、(5). 文字の誤りを正す、(6). 標紙・軸・緒などを装着する、(7). 外題を書き込む、という過程を経て完成する。(6)の標紙・軸などの装着以前、作業をしやすくするため、軸付紙を右端に貼り継ぎ、さらにその右方に仮の軸を付していた。書写後には仮軸を取り外して左端から巻き込むことによって仮標紙に転ずるこの紙を「端継」というが、(6)で写経料紙の一部と共に切り落とされる。この切り落とされた端継が経師や校

17) 杉本一樹「端継・式敷・裏紙」(『日本古代文書の研究』吉川弘文館、2001。初出は1991)、正倉院事務所「〈正倉院宝物特別調査〉紙(第2次)調査報告」(『正倉院紀要』32、2010)、飯田剛彦「(コラム) 正倉院の紙と平城宮木簡」(『木簡研究』32、2010)。

18) 界線の引き流れとは、写経料紙に淡墨横界を施す際、界線の必要のない端継にまで線がまたがって引かれた部分を指す。別の文書に二次利用された端継を特定する際の一つの指標となる。

生等の作業報告用紙として利用したために、このような形態の帳簿が出来上がることになったのである。端継の天地には軸を装着する際につけられた斜めの折れ筋が認められ、経巻作成時に加えられる情報（例えば、経師名、打紙の担当者名等）が記されている場合もある。経師名等が記されるのは、作業過程での必要性によるものであろうが、結局は切除の上、廃棄されている。この点で対照的なのが中国写経であって、翻訳の場合、筆受・証文・正字・証義、写経の場合は写・装潢・初校・再校・三校等の分担者名が、それぞれ巻末に仰々しく記される（それぞれ訳場列位、校経列位と称する）。ここに、両国の写経に対する意識の違いを見出すことができるかもしれない。

## 2) 「下纏」

正倉院文書の中に整理された写経時の道具の一つとして、「下纏」と称する紙がある。表面には横方向に18本の墨線が引かれ、裏面には墨点の写りが多数認められる。書写時には書写行の右側に置き、字配りの基準とすると共に、展げて墨を吸い取っていったものと考えられる。

## 3) 「仮帙」

写経所帳簿の料紙として二次利用されているものの中には、書写の過程で仮に経巻を包んでおくための仮帙もある。仮帙として使用されている紙はやや上質の楮紙であるが、紙端上方に帙題が墨書され、場合によっては経巻の紐からの色移りや、紫紙の標紙からの色写りが認められることもある。

#### 4) 「裏紙」

写経所文書として二次利用された紙の中に、紙端に人名と年月を記した滓紙（製紙段階で混入物として選り分けられた粗繊維を集めて漉いた屑紙）が混じっていることがある。そこに記された人名の一つ「三野部石嶋」が、平城宮内裏北外郭官衙出土の木簡において、「勅旨紙を打つ」という名目で召喚された人物の名と一致することが最近判明した<sup>19)</sup>。木簡と正倉院文書の記載内容がこれほど密接にリンクする例は稀有といえる。

石嶋には写経所での勤務実態が窺えないので、まず、外部の製紙技術者が完成した紙を納品する際に使用した裏紙と考えた。だが、別の可能性も想定できる。写経所では内部で打ち上がった紙を次の工程に送る際にも裏紙が用いられており、それに当たるかもしれないのである。打紙は仕丁や駆使丁・雇夫等も従事する作業なので、石嶋がこのような立場ならば、装潢として写経所帳簿に名を残さないのも不思議ではない。実際、別の滓紙で同様に名のみえる刑部広国という人物は石山寺で雇夫として働いていた<sup>20)</sup>。

上記二説のいずれを是とするかについては、「勅旨紙を打つ」行為の意味、裏紙に名と年月を記す目的等、様々な要素を勘案のうえ、慎重に検討しなければならない。

19) 正倉院事務所「〈正倉院宝物特別調査〉紙（第2次）調査報告」（『正倉院紀要』32、2010）。

当該木簡は平城宮SK219土壙出土木簡56（『平城宮木簡』Ⅰ所収）で、オモテに「符三野部石嶋等□□□ 右為打 勅旨紙召宜知此状以」、ウラに「莫為怠遅符到奉行 大属錦部連真道 □」との記載がある。恐らく、三野部石嶋らは図書寮の庭に召喚されて、勅旨の紙（勅旨を記す紙か、勅命による写経事業所用の料紙などか）に打紙加工を施したものと考えられる。

20) 造石山寺所下銭帳（『大日本古文書』15巻、P459）。

## V. 注目すべき経巻など（新羅との関連から）

### 1. 聖語蔵経巻甲種写経第10号大方広仏華嚴経巻72～80について

近年、山本信吉氏が正倉院事務所刊行の機関誌『正倉院紀要』に寄せられた論文において、聖語蔵の甲種写経第10号大方広仏華嚴経が新羅時代の韓半島で書写されたものであるとする説が発表された<sup>21)</sup>。山本氏の挙げるその理由は、(1). この経巻は巻72から巻80までの9巻を1巻内に連続書写した一部合巻経であるが、華嚴経の合巻経の例は奈良時代になく、新羅・高麗時代の華嚴経には仏像や仏塔の納入経としてその例がある、(2). この経巻は本来の本文を46%に圧縮した省略本であり、奈良時代の写経としては特殊である、(3). 料紙は無界の楮紙で、奈良朝写経に類例がなく、一方、新羅・高麗時代の写経には白楮紙を用いたものがある等である。

さらに、小林芳規氏が『南都仏教』に寄せられた論文で、東大寺図書館収蔵の大方広仏華嚴経〈自巻第十二／至巻第二十〉が聖語蔵甲種第10号の僚巻であり、かつ、この経巻には角筆による新羅語と新羅の訓読符号の書き入れが認められるとされている<sup>22)</sup>。

聖語蔵の華嚴経は、1紙の縦26.0cm・横57.0cm、全55紙で全長は3077.5cmであり、1紙には1行17字から20字で32行が記される。軸は黒漆塗朱頂軸である。界線の施された痕跡がなく、現存する東アジアの写経全体の中でみても、非常に珍しい。

確実な新羅経の遺例である、天宝14年(755)書写の三星リウム美術館所蔵・新羅白紙墨書大方広仏華嚴経(国宝196号)は、巻41から巻50ま

21) 山本信吉「聖語蔵『大方広仏華嚴経〈自巻七十二／至巻八十〉』の書誌的考察」(『正倉院紀要』28、2006)。

22) 小林芳規「角筆による新羅語加点の華嚴経」(『南都仏教』91、2008)。

での一部合巻細字經で、仏塔に納められていたという。料紙の白さについては、韓国国宝經と聖語藏本の白さとは異質なものであるとの所見を紙の専門家から伺っているが<sup>23)</sup>、書写形式の類同性から聖語藏本も新羅經である可能性は高い。今後、使用字体や角筆の検討など聖語藏本の検討をさらに進める必要がある。また、韓国の華嚴經についても、より詳細な調査とその公表が待たれるところである。

## 2. 正倉院宝物・梵網經について

聖語藏經卷とは別に、正倉院宝物の中に、奈良時代に大乘戒思想の代表的な經典として重視されていた梵網經の写本1巻が伝存している(中倉34)。白紙を24張半貼り継ぎ、1紙41行、各行17字詰で書写した、全長1413.9cmの經卷である。

この經卷の料紙に流し漉きの紙が使用されているとの観察所見に基づいて、古代料紙研究の立場から、日本製かつ平安時代以降のものとされてきた<sup>24)</sup>。しかし、流し漉きの紙イコール平安時代以降の日本製とするこの図式については、近年の紙の調査によって疑義が呈されている。すなわち、奈良時代の紙でも天地方向に繊維の流れを観察できるものは多く、梵網經の料紙に使用された雁皮の繊維は特に一定方向の流れが生じやすい特性を有するので、料紙の特徴からこの梵網經を日本製かつ平安時代のものに限定する説は現状では成り立ち難くなったのである<sup>25)</sup>。

23) 正倉院の紙の第2次特別調査(平成17~20年[2005~2008])に調査員として参加された大川昭典氏(元高知県立紙産業技術センター技術部長)は韓国の新羅白紙墨書大方広華嚴經を調査した経験をお持ちとのことで、口頭ではあるが、両者の比較所見を伺った。それによれば、韓国国宝經の料紙は非常に透明感のある白紙で、甲種写經華嚴經の料紙と比較すると、より手を掛けて入念に作成した料紙であろうとのことであった。

24) 『正倉院の紙』(日本経済新聞、1970)。なお、この『正倉院の紙』は、昭和35年から37年にかけて行われた、正倉院の紙を対象とした第1次特別調査の成果である。

さらに、このような料紙研究の進展による見直しとは別に、近年、この経巻を、正倉院文書中の記録が伝える、勝宝4年の新羅使が献納したものにあてる説が東野治之氏によって唱えられている<sup>26)</sup>。『続日本紀』によると、天平勝宝4年(752)、王子・金泰廉を大使とした新羅使が来朝した。700名を数えるこの大使節団が、東大寺大仏を参拝した際、法華経8巻、梵網経1巻、頭陀経1巻を献納したことが正倉院文書から知られる<sup>27)</sup>。文書の記載によれば、この梵網経は象牙軸で、標紙見返しには銀泥で仏が描かれていたという。正倉院収蔵の梵網経は標紙見返しに金銀絵が施されているが、東野氏は、明治時代の修理記録を参考に、これが近代になってから、別に伝わっていた経巻の標紙を装着したものとされたのである<sup>28)</sup>。

東野氏の説に関しては、この明治時代の修理記録は「標補之筒蓋造之」とあるもので、氏のように新たに標紙を装着したとも解釈できるが、単に旧来の標紙を修補したとも解せる。現物を観察したところ、現状の金銀絵標紙は当初の装丁で別の部品との取り合わせではなく、また、かなりの修補が加えられているので、後者と考えた方がよさそうである。さらに、この経巻は、天平勝宝4年の新羅使が献納した梵網経のような、象牙製の軸も有していない。よって、正倉院の梵網経を天平勝宝4年の新羅使が大仏に献納した経巻とする東野氏の説は成り立たない。

25) 正倉院事務所「〈正倉院宝物特別調査〉紙(第2次)調査報告」(『正倉院紀要』32、2010)、増田勝彦「正倉院文書料紙調査所見と現行の紙漉き技術との比較」(同上)。

26) 東野治之「新羅交易と正倉院宝物」(『第五十四回正倉院展目録』奈良国立博物館、2002)。

27) 自所々請来経帳(『大日本古文書』12巻、P288・289)。献納された梵網経は「縹絹外浅紫錦表及綺牙軸用銀墨写表裏座仏像」といった装丁であったという。

28) この修理記録とは「正倉院御物修繕還納目録」(東京国立博物館館史資料1055)と称されるものである。梵網経は明治26年(1893)12月に東京に回送され、修理ののち、同28年10月に宝庫に還納されている。修理を担当したのは正倉院御物整理掛で、同じ宮内省所管の帝室博物館(東京国立博物館の前身)にその事務書類が残ったのである。

ただし、正倉院の梵網経が特殊な経巻であることは否定できない。それは、(1). 梵網経2巻1部を1巻に書写した、いわゆる合巻経であること、(2). 天地の寸法 (21.0cm) が古代の経巻としては著しく小さいこと、(3). 経帙ではなく、附属の経筒が存すること、(4). 水晶の軸端を装着していること等々の諸点である。特に、(1) などは、甲種写経華嚴経を新羅経とする主要な根拠であり、この梵網経の性格を考える上では重要なヒントとなる。新羅や唐からの舶載経である可能性も含めて、今後、この梵網経について精査を加える必要性を強く感じる。

## VI. 研究基盤について

### 1. 正倉院収蔵資料をめぐる研究環境の整備

以上で述べたように、正倉院文書・聖語藏経巻は、日本のみならず古代東アジアの仏教のあり方を考察するうえで非常に重要な資料である。ただ、現在の管理下では、簡単に原本の調査・閲覧ができるような状況にはない(実物を観る機会としては、奈良国立博物館で開催される「正倉院展」があり、正倉院文書が7~8巻程度、経巻では通例、隋唐経・天平十二年御願経・神護景雲二年御願経からそれぞれ1点ずつが毎年出陳される)。そのため正倉院事務所では、それに代わる手段として、写真・画像の出版刊行、調査結果の公表などを積極的に行っている。また、最近では、正倉院事務所提供のデータを活用したデータベースの整備なども各方面で進んでいる。本章では、正倉院文書・聖語藏経巻を研究する上で参照すべき資料を紹介する。なお、宮内庁正倉院事務所の刊行する『正倉院紀要』(年報として1979より刊行)には、毎年の研究成果が報告

されているので、以下の資料と併せて参照願いたい。

## 2. 正倉院文書の利用

まず、正倉院文書の研究においては、そのほぼ全てを活字翻刻した、(1)『大日本古文書』編年文書全25巻(1901～1940)が最も基本的な史料集となる。どのような文書があり、どのような語句が記されているのかを概観するためだけにでも、まずはざっと目を通していただきたい。ただ、実際に研究する場合には、『大日本古文書』を利用するだけでは不十分である。すでに述べたように、正倉院文書は近世・近代の整理過程で分断されて混乱した部分があり、『大日本古文書』はできるだけ復元を行って翻刻しているが、誤りも多い。よって、近年行われている原本調査の情報を参照する必要がある。その際利用すべきは、(2) 東京大学史料編纂所編『正倉院文書目録』(東京大学出版会、1987～)と、(3) 宮内庁正倉院事務所編『正倉院古文書影印集成』(八木書店、1988～)である。(2)は主に文書断簡の接続を復元する情報を提供し、(3)は精細な原本のモノクロ写真と、原本の基礎情報と調査所見を提供するものである(ただし、(2)・(3)ともに刊行継続中で、現状では正倉院文書全体の3割程度しかカバーしていない<sup>29)</sup>)。(1)～(3)から必要な情報を読み取って研究するのが、正倉院文書研究の基本である。

索引類としては、関根真隆編『正倉院文書事項索引』(吉川弘文館、2001)、特に仏典索引には木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引』(国書刊行会、1989)がある。また、東京大学史料編纂所が公開する「奈良時代古文書フルテキストデータベース」(<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac>、

29)『正倉院文書目録』は続々修第1～4帙を扱った第6冊(続々修1)、『正倉院古文書影印集成』は塵芥文書の裏・雑貼・蠟燭文書を扱った第17冊までをそれぞれ刊行済である。



jp/ships/db.html) では、(1) の一字漢字検索が可能であり、便利である。ほかに、専門の学会である、正倉院文書研究会が『正倉院文書研究』という研究誌を現在11号まで刊行している。

### 3. 聖語藏経巻の利用

聖語藏経巻については、活字翻刻された刊行物等はなく、Ⅲで言及した『正倉院聖語藏経巻目録』(奈良帝室博物館、昭和5年 [1930]) も入手は難しい。ただ、平成13年 (2001) 年より刊行の始まった、宮内庁正倉院事務所編『聖語藏経巻』(丸善株式会社) は、高精細のカラーデジタル画像を提供するもので、以前とは比べものにならないほど研究基盤が整備された。この出版では、経巻を1紙単位でカラーマイクロ撮影し、それをデジタル化している。媒体 (当初はCD-R、現在はDVD) には、スクロール可能なナビゲーション画面の画像、天地が収まる大きさの画像、スキャナで読み込んだ精細な画像の3種類を組み込んで、必要に応じた画像の呼び出しが容易に可能なようにしてある。白書の再現性も非常に高く、訓点語学の上でも非常に有益な材料である。ただし、価格は非常に高く、普通に個人が購入できるものではない。研究機関や寺院等に備え、それを共同利用するというあり方が想定されている。現在、隋唐経、天平十二年御願経、神護景雲二年御願経については刊行済みで、甲種写経が刊行中である<sup>30)</sup>。

参照すべきデータベースであるが、大蔵経テキストデータベース委員会の (1) 大正新脩大蔵経テキストデータベース (<http://21dzk.l.u-tokyo>、

30) 宮内庁正倉院事務所編『聖語藏経巻』(丸善株式会社) は、第4期甲種写経第1回配本 (甲種写経第51号大方広仏華嚴経巻59まで) が完了している。なお、この甲種写経第1回配本分には、新羅経との推定のある、甲種写経第10号大方広仏華嚴経巻72~80も収録されている。

ac.jp/SAT/) は恐らくご存知であろう。大正蔵の一字漢字検索ができる。その他、(2) 国際仏教大学院大学「日本古写経データベース」(<http://koshakyo-database.icabs.ac.jp>) や、(3) 漢字字体規範データベース編纂委員会漢字字体規範データベース(<http://www.joao-roiz.jp/HNG/>) がある。(2) は、経巻名から、聖語蔵(奈良)、金剛寺(大阪)、七寺(愛知)、石山寺(滋賀)、興聖寺(京都)、西方寺(奈良)、新宮寺(宮城)、妙蓮寺(京都)等、日本各地に伝来する一切経にその経巻が現存するか否かを確認できる。金剛寺本については、冒頭部分のデジタル画像が見られる場合もある。(3) は漢字の字体には規範があり、それが時期的に変遷するという認識のもと、その規範を反映した文献の文字画像を提示し(聖語蔵経巻の一部も含む)、比較検討の材料としている。ある時代の、ある地域の規範的な字体が分かれば、それに基づいて、古写経の製作時期や製作地域を推定することも可能かもしれない。

## むすびにかえて

最後に、今回の報告をまとめて、むすびにかえたい。(1)、正倉院は単なる古美術品の倉庫ではなく、8世紀の仏教文化のあり方や、国際的な交流の具体相を示す材料が豊富に収蔵されていること、(2)、その中でも特に写経所文書・帳簿としての正倉院文書が残り、また、その帳簿によって由緒を明らかにし、製作過程を辿ることのできる聖語蔵経巻という現物が伝来していること、(3)、特に仏教学に関連していえば、通行の『大正新脩大蔵経』は貴重な成果ではあるが、それだけでテキストとしての古代仏教經典に遡及できると考えるのは危険であり、敦煌本や聖語蔵経巻な

どの現存古写經を用いた新たな校訂本が作られる必要があるし、また、それによって『大藏經』の価値もより一層高まるはずであること、(4) 聖語藏經卷の中には、新羅經と推定される經卷も含まれており、今後も検討を進める必要があること、などである。

正倉院文書で示されるのは、あくまで日本での写經の事例ではあるが、写經をめぐる仕事の仕方という点でいえば、古代の新羅仏教を考えるうえでも十分参考になるものと考ええる。よって、韓国の研究者が正倉院文書を素材とした研究をされることは非常に意義深いことである。そこから日本の我々が学ぶところも多いに違いない。

また、正倉院には歴史の専門家はいるが、仏教の専門家はいない。しかし、真の意味で当時の仏教のあり方を理解するためには、教義内容にまで踏み込んだ検討が必要である。さらに、日本国内での教義の理解度を相対的に把握するためには、広く東アジア全体の中での位置づけというものも重要になってくる。聖語藏經卷に関する研究において、東アジア諸国全体における仏教学研究が極めて大きな意味を持つことは、以上のような観点からみても明白である。逆に、今回の発表で種々述べたように、東アジア仏教学にとっても聖語藏經卷を含めた古写經研究は、今後欠くべからざるものになると考える。刊本一切經のみでは唐代仏教の基本テキストに近い仏典をみることは不可能である。敦煌写本も一切經の三割程度の分量しか現存していないといわれるので、奈良平安時代の日本の古写本の重要性は極めて高い。国際的かつ学際的な研究がより進展するような状況が実現していくことを切に願うものである。正倉院事務所の研究職員は、主として宝物の現物から様々な情報を収集し、それを元に研究を行って外部に発信するのが役目であるが、私も自らの役割を十全に果たして、上記の研究に貢献できれば、と考える。

## 参 考 文 献

- 石上英一・加藤友康・山口英男編『古代文書論』(東京大学出版会、1999)
- 大平聡「正倉院文書研究試論」(『日本史研究』318、1989)
- 宮内庁正倉院事務所編『正倉院宝物』(全10冊)(毎日新聞社、1988~97)
- 熊谷公男「正倉院宝物の伝来と東大寺」(『太陽シリーズ 正倉院と東大寺』(平凡社、1981)
- 栗原治夫「奈良朝写経の製作手順」(『続日本古代史論集』中、吉川弘文館、1972)
- 国立歴史民俗博物館『古代日本 文字のある風景』(朝日新聞社、2002)
- 『学鑑』96-10(特集 正倉院 聖語蔵経巻カラーCD出版記念)(丸善、1999)
- 栄原永遠男『奈良時代の写経と内裏』(塙書房、2000)
- 『奈良時代写経史研究』(塙書房、2003)
- 杉本一樹『週刊朝日百科 皇室の名宝 正倉院 文書と経巻』(朝日新聞社、1999)
- 『日本古代文書の研究』(吉川弘文館、2001)
- 『正倉院の古文書』(日本の美術440)(至文堂、2002)
- 『正倉院-歴史と宝物』(中公新書)(中央公論新社、2008)
- 『正倉院宝物の世界』(日本史リブレット)(山川出版社、2010)
- 東野治之『正倉院文書と木簡の研究』(塙書房、1977)
- 『正倉院』(岩波新書)(岩波書店、1988)
- 『遣唐使と正倉院』(岩波書店、1992)
- 中林隆之『日本古代国家の仏教編成』(塙書房、2007)
- 西洋子『正倉院文書整理過程の研究』(吉川弘文館、2002)
- 西洋子・石上英一編『正倉院文書論集』(青史出版、2005)

- 橋本義彦『正倉院の歴史』(吉川弘文館、1997)
- 福山敏男「奈良朝に於ける写経所に関する研究」(『寺院建築の研究』中、中央公論社、1982)
- 『日本建築史の研究』(綜芸社、1980)
- 堀池春峰『南都仏教史の研究』上(法蔵館、1980)
- 丸山裕美子『正倉院文書の世界』(中公新書)(中央公論新社、2010)
- 皆川完一「光明皇后願經五月一日經の書写について」(『日本古代史論集』上、吉川弘文館、1962)
- 皆川完一編『古代中世史料学研究』上(吉川弘文館、1998)
- 宮崎健司『日本古代の写経と社会』(塙書房、2006)
- 山下有美『正倉院文書と写経所の研究』(吉川弘文館、1999)
- 山本幸男『写経所文書の基礎的研究』(吉川弘文館、2002)
- 米田雄介『正倉院宝物の歴史と保存』(吉川弘文館、1998)
- 『正倉院と日本文化』(吉川弘文館、1998)
- 『正倉院宝物の故郷』(大蔵省印刷局、1999)
- 『正倉院宝物と平安時代一和風化への道』(淡交社、2000)
- 『奇蹟の正倉院宝物』(角川選書)(角川学芸出版2010)
- 米田雄介・杉本一樹編著『正倉院美術館』(講談社、2009)
- 米田雄介・樫山和民編著『正倉院学ノート』(朝日選書)(朝日新聞社、1999)
- 和田軍一『正倉院案内』(吉川弘文館、1996)

※ なお、本文註にて触れた参考文献については、一部の例外を除いて割愛している。

**Abstract**

## **About the Fascicles of the Scriptures in Shogozō at Shōsōin**

IIDA Takehiko

*Office of The Shosoin Treasure House*

This article purports to present a synopsis of the Shōsōin, the treasures of the Shōsōin, and the fascicles of the scriptures in Shogozō in Shōsōin, explaining why the texts of Shōsōin, especially the fascicles of the scriptures in Shogozō are important resources for the study of ancient Buddhism.

Shōsōin is not just a treasury of art pieces, storing many treasures with strong Buddhist characteristics and in relation with the Korean Peninsula. Therefore, for the restitution of the Buddhist space in the ancient Korean Peninsula, it is very helpful.

The texts of the Shōsōin are valuable in that they suggest the actualities of copying scriptures in the ancient period. They are a great collection of texts made according to the process of copying scriptures under various projects of copying scriptures in the Nara period, clarifying the concrete

aspects of the process of copying scriptures in that period.

In addition, among the Buddhist resources at the Shōsōin office, there are the fascicles of the scriptures in Shogozō, which is distinguished from the general treasures of the Shōsōin. The scriptures of the Shogozō have been originally stored at the Sonshōin on top of the stupas in the Tōdaiji, mainly consisting of the Hakusaikyō (Buddhist scriptures carried by ships) from the Sui and Tang periods and the two major authorized versions of Buddhist scriptures in the Nara period, that are the Tempyō 12<sup>th</sup> year and the Shingokeiun 2<sup>nd</sup> year authorized scriptures, including about 5,000 fascicles of ancient manuscripts and printed scriptures. Although the Taishō Daizōkyō is used most generally for Buddhist textual studies, since it is based upon the Korean version of 12th-13th century, it is said to be unsatisfying for the purpose of tracing ancient Buddhist texts. For its correction, the fascicles of the scriptures in Shogozō are evaluated to be extremely important in that they include many ancient manuscripts. Besides, there are many extant Hakusho texts in them, which are unusually valuable for the study of the ancient Japanese linguistics.

The fascicles of the scriptures in Shogozō, especially the Tempyō 12th year and Shōsōin manuscripts, are mutually in the relation of the actual extant manuscripts made in the Nara period and the texts for their production. Therefore, by the comparison of both, the process of their production and the efforts for the enhancement of their textual quality can be clarified, besides the fact that there may be a few cases where the characteristics of some texts and scriptures might be clarified by mutual comparison.

Among the scriptures, there are some texts that might be from Silla dynasty. the fascicles of the Avatamsaka sutra from 72<sup>nd</sup> to 80<sup>th</sup> volumes, are suggested to be from Silla dynasty in their style of copying, while there are some opinions regarding the Brahmajāla Sutta in the treasury of the Shōsōin as sent to the Daibutsu of the Tōdaiji from Silla dynasty at the Tempyō 4<sup>th</sup> year.

In short, the Shōsōin texts and the fascicles of the scriptures of the Shogozō are valuable for the study of ancient Silla Buddhism, while the Shōsōin texts are printed, made into photos, and catalogued, besides the digitalization of the fascicles of the scriptures of the Shogozō. There might be fruitful researches utilizing these resources.

**Key Words :** Shōsōin, Shogozō, Tōdaiji, Sonshōin, Tempyō, Shingokeiun

2011년 5월 20일 투고

2011년 6월 20일 심사완료

2011년 6월 21일 게재확정